

今だからこそ求められる福井の魅力再発見 時代を超えた努力がつくる福井の誇り

来年度に迫る福井国体や、5年後の北陸新幹線福井開業を控え、観光面での福井の集客力が試される時が来た。

福井を訪れた観光客の数や目的などをまとめた統計「平成28年度福井県観光客入込数（福井県観光振興課調べ）」によると、市町村別で最も観光客が多いのは福井市（約400万人）だ。しかしその一方で、福井県の観光地として有名なのは恐竜博物館や永平寺、東尋坊など、福井市外のスポットであり、福井市中心部は埋没しがちである。

今回の特集では、福井市中心部の隠れた名所や伝統文化を取り上げる。他の地域にはない福井の魅力を再認識し、何が「魅力」として感じてもらえるのか、地域の良さを伝えるには何が必要なのかを探った。



福井人のアイデンティティ

に繋がる「石の文化」

笏谷石が支えた福井の産業

青緑の緻密な石肌を持ち、水を掛けると鮮やかな青が浮かび上がる「福井の足羽山」のみ産出する笏谷石は、全国の歴史的建造物にも使用されている名石だ。笏谷石は、伝説において継体天皇の勸めで生産が始まったとされる。考古学上でも古墳時代の石棺に笏谷石が使用されていることから、古い時代から石材として利用されていたことがわかる。江戸時代になり北前船の運航が始まると、笏谷石が広く普及し始める。「越前石」と呼ばれて全国で取引され、福井の一大産業となった。

かつて笏谷石の生産を営んでいた越前石（福井市加茂河原4・6・5）の福島喜衛氏は、「笏谷石の取引は歴史的に続けられており、そこで得た富が後の福井の発展の土壌の一つになった」と考えている。

地中に広がる大坑道 「笏谷石採石場跡」

笏谷石を産出した足羽山の地下には、長大な「坑道」と、とても地下とは見えないほどの高さで広さを持つ「採石場」が存在する。

採石場がここまで開けた空間となったのは理由がある。元々笏谷石は標高の高い上部から下に向けて採掘され、垂直に穴が作られた。戦時中には、採石場は海軍の飛行機生産工場として接収され、この時に縦穴を繋ぐように坑道が掘られ、広い空間が造られた。福島氏は「軍の工場として再整備されたことで採石場の保全環境が向上し、現代にそのままの姿で残すことができた」と分析する。

笏谷石は古代から採掘され続



越前石（株）
代表取締役 福島 喜衛 氏



採石場跡。この空間は、当時の住民の手によるものだ

けてきた。採石は極めて重労働であり、人々は約100kgの石材を抱えて作業していたと伝わる。切り出した石材は足羽川を伝って三国に輸送され、三国湊から北前船で全国に運ばれた。その寄港地には笏谷石の建材や置物が数多く残っている。

現在は笏谷石の採掘は終了しているものの、当時は機械もなく、全て手作業で採掘されていた。採石場跡からはこうした当時の人々の営みを肌で感じるこ

「努力遺産」を

後世に伝え続ける

福島氏は、笏谷石の採石場を福井の「努力遺産」と考える。

「この場所は生活のために危険



ピアノコンサートなどのイベントを通じ、笏谷石や採石場をアピールする

な作業に従事していた人たちの努力で造られている。このような「思い」や「勤勉さ」の積み重ねは福井のアイデンティティにも繋がる」と福島氏は語る。その一方で、福島氏は福井の人々は自身の強みを表に出さない傾向があると考えている。「地域の魅力は積極的にPRしなければ、十分に伝え切れない。だからこそ、福井の人々の努力の結晶である笏谷石を地域の誇りとしてこれからも伝え続けたい」。そう語る福島氏は、昨年、採石場跡でピアノコンサートを開催。150名を超える観客を集め、笏谷石のPRを行った。今後も、様々な広報活動を通じ、福井の産業を興した、誇るべき笏谷石文化を地域内外に伝え続けていく。

福井の産業振興と共に 発展した芸妓文化

明治から現代まで続く 浜町芸妓

明治から昭和にかけて、福井の繊維産業は最盛期を迎えていた。盛況を誇った当時の企業の社員たちは繁華街に繰り出し、福井の中心部を大いに賑わせた。その繁栄に彩りを加えていたのが福井の芸妓文化（浜町芸妓）だ。浜町芸妓のルーツは古く、近代では明治期に芸妓の学校が創立された記録が残る。当時の花街は照手町や橋南地域にも広がっており、宴席を盛り上げていた。多彩な芸が披露される中、特に「福井小唄」は福井の情景や歴史を唄ったもので、当時から唄い継がれる、地域特有の文化である。

昭和20年7月に、福井は大空襲を受け、戦災復興途中の昭和23年には福井地震が発生。さらには水害にも遭い、甚大な被害を受けた。花街も大きな被害を



(一社)福井・浜町芸妓組合
理事長 今村 百子 氏

受けたが、その後、いわゆる「ガチャ万時代」が到来「不死鳥」と謳われる大復興を遂げた。繊維産業の興隆に伴い、花街も再び賑わいを見せた。

存続のための

新たな取り組み

繊維産業は変遷し、繊維に携わる企業数が減少。同時に花街も衰退していく。芸妓存続の危機に陥ったこともあったが、現在は(一社)福井・浜町芸妓組合(福井市中央3丁目9・26)が浜町芸妓の伝統を守り続けている。今村百子理事長は福井の芸妓文化を守るため、芸妓の知名度向上と組織強化の取り組みを行っている。浜町芸妓の重要課題である後継者不足解決のため、今年3月に新卒対象の就職説明会に参加。学生と接す

る場を作り、芸妓という職業をPRした。

また、芸妓の活動を多くの人に知ってもらうために、「浜町芸妓温習会」や、全国の芸妓団体の協力のもと「花あかりふくい」(P62参照)を開催し、多くの観客に向けて華やかな芸を披露した。この他にも、昼の時間帯に福井県内の主要観光地でガイドをするなど新たな取り組みを次々と始めている。後継者育成という点で、次に目指す先は「置屋制度」の復活。これは芸妓たちを一つの家に住ませ、日常生活を通して芸妓として必要な技能や知識を学ぶもの。これを現代に適した形に変えて後進を育てていきたいと考えている。



浜町芸妓組合には、現在4名が在籍している



昨年5月に開催された「浜町芸妓 温習会」

福井の魅力は「繋がり」の強さ

今村氏は、福井の良さを「繋がり」の強さ、距離感の近さ」と語る。「花あかりふくい」の後半では、福井市中心部の5つの料亭にて宴席が設けられた。同席した他地域の芸妓が驚いたのは、「客同士仲の良さ」だった。今村氏は「地域の魅力といっても、そこにいる人たちが楽しんでなければ魅力は伝わらない」と語る。「浜町は歴史的に地域の人たちとの強い繋がりで栄えた街。その繋がりを活かし、来訪客を福井のコミュニティに引き込み、繋がり」の強さがつくる楽しい思い出を作ってもらいたい」と、今後の芸妓文化の在り方を熱く語った。

地元の偉人が活躍した 現場を探访

福井の文化サロンとして 福井藩医が建立

丹巖洞(福井市加茂河原1・5・12)は草庵や庭園、料亭が揃った名所。江戸時代の後期に福井藩医を務めた山本瑞庵の別荘として草庵が建立されたのが起源となる。加茂山を背景とし、足羽川を望むことができる景勝地として多くの著名人が訪れている。また、幕末の志士たちの密談の場としても広く知られている。明治時代以降は要人の接待や会議の場として使用された。戦災や震災で失われることなく当時の姿をそのまま現代に伝えている。

草庵の最初の姿は、福井の文化サロンだった。山本瑞庵は和歌や俳句を好む風流人であり、丹巖洞は同好の文化人との交流の場であった。彼らは草庵から望む絶景を楽しみながら作品を披露した。橘曙覧や松平春嶽も

草庵を訪れ、丹巖洞を詠った作品を残している。

新しい日本を模索する 志士たちの残滓

幕末期になると、草庵は文化サロンとは別に密議の場としても使われ始める。福井藩主である松平春嶽は開明的な考えを持っていたが、福井藩自体は將軍家に近い親藩のため、難しい舵取りを強いられていた。この状況にあつて草庵が密議の場となったのは、春嶽自身が訪れたことがあり、閑静な景勝で、落ち着いて話しやすい環境だったからかもしれない。草庵を訪れたとも伝わる坂本龍馬は、改革には福井藩の力が不可欠と考え、死の直前まで福井藩と交渉し続けたと言われている。

現在、草庵の中は資料館と



料亭 丹巖洞
代表 宮崎 信雄 氏



草庵は福井地震で被害を受けたが
現在まで保存され続けている

なっており、展示資料などから
当時を偲ぶことができる。

時代で変わる

顧客ニーズに対応

明治以降、会議の場として多くの客が訪れる中、接待の場として丹巖洞が選ばれるようになった。この頃、山本家から宮崎家に所有が変わり、料亭「丹巖洞」を創業して接待の質を向上させた。昭和期には岡田啓介に代表される要人の接待に多く利用されている。

バブル崩壊をきっかけに料亭の需要は大きく減少した。店を畳むところも出る中で、丹巖洞は現在も営業を続けている。

丹巖洞は草庵だけではなく、庭園や客間も全て揃って一つの名所になる。その維持にかかる



丹巖洞庭園は宮崎家が
増築や補修を続けて現在に至る

時間と手間は想像を絶する。「歴史ある建築物が多く、昔ながらのやり方で補修しなければならぬ箇所があるなど手入れは簡単ではない。敷地内の大木も寿命が近いものがあり、伐採した木もある。しかし、先祖代々手をかけて維持し続け、地域社会にも密接に根付いているため、丹巖洞を潰してしまうわけにはいかない」と宮崎信雄代表は強い意志を込めて語る。最近では、結婚式の多様化に伴い、和風の結婚式会場として選ばれる機会が増えた。また、丹巖洞の絶景を撮影スポットとして利用する人も増えている。例えば、成人式用の写真の撮影ニーズなどが増加している。時代が求める役割を果たしつつ、丹巖洞は地域と共に今後も在り続ける。

努力や思いの積み重ねが 福井の魅力をつくる

今や観光は、物見遊山のなみのから地域特有の文化、産業、さらには生活体験などが中心となっており、これまでとは大きく様変わりしている。

今回取材した事業所や団体は、歴史的な遺産や伝統文化をたゆまぬ努力で維持し、さらには時代に合わせた取り組みで秘められた魅力を現代の人々に伝えている。先人たちが積み重ねてきた努力や思いの詰まった遺産、文化は、観光客にとって地域の大きな魅力となる。

国体や新幹線開業など来年度以降、福井を訪れる観光客は確実に増える。しかし、受け入れ側が福井の魅力をよく実感したうえで伝えていかなければ、観光客に魅力を伝えることはできない。我々自身が地域の産業や文化を理解し、誇りを持つことが観光客を受け入れる第一歩となる。